慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュル・ファシズムとネオ・ソシアリズム : バタイユ、ドリュ (2)
Sub Title	Surfascisme et néo-socialisme : Bataille, Drieu (2)
Author	市川, 崇(Ichikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.103, (2012. 12) ,p.100(163)- 113(150)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川口順二教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01030001-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュル・ファシズムとネオ・ソシアリズム ――バタイユ、ドリュ――（2）

市川　崇

社会学研究会とフランス人民党

ドリュ・ラ・ロシェルは、1930年代に少なくとも一度、ジョルジュ・バタイユの思想に言及している。ドリュは、1935年に『新人』に寄せた評論のなかで、マルセル・デアの率いるネオ・ソシアリストへの火の十字架団の下部組織ヴォロンテール・ナショノーの一部団員の合流を讃えた後、ジャック・ドリオを党首として1936年に創設され、少なからずファシスト的傾向を持つフランス人民党に入党した。そしてドリュは、同党が刊行する雑誌『国民解放』に多くの評論を寄稿したが、1938年7月22日には、バタイユ、ロジェ・カイヨワ、ミシェル・レリスの主催する社会学研究会の講演が伝える思想について、「人間の現実主義的な理解へ向けて」と題された論説を発表している。左翼の思想家たちが、マルクスの思想の合理主義的側面のみを継承し、プルードン、ニーチェ、ベルグソン、テーヌ、ルナン、モーラスらの非理性的思考の豊かさを顧みないと批判した後、ドリュは書いている。

> しかし実際、若き思想家たちの一グループが今年、社会学研究会を創設し、ベルグソンの思想以来の最も大胆な合理主義への攻撃を見せ始めたことに注意を喚起することは、より重要であろう。

バタイユ、レリス、カイヨワは、『新フランス評論』7月号に、社会

学研究会の宣言を形成する三つの論文を発表したばかりだが、この宣言はフランスの新たな思想が、1936年の軽薄で俗悪な情熱が過ぎた後、その最も真摯で重要な要素を明らかにする様子を大いに伝えてくれるのである[1)]。

創設宣言の発表に先立って1937年に活動を開始していた社会学研究会の講演の聴衆のなかにドリュが姿を見せていた事実は、すでに複数の証言をもとにドニ・オリエによって指摘されている[2)]。しかし、バタイユらの思考についてのドリュの実際の考察を取り上げた研究はこれまでなされてこなかった。ドリュは、社会学研究会におけるバタイユらの考察は、以下のような内容を持つと語っている。人間は集団から独立した個人としては生きられず、他者たちと思考や行動を共有するグループを形成すのであり、その思考や行動は、グループの構成員らが「相互の絆を繋ぐ身振りに」、「儀礼的、魔術的な」、絶対の価値を認める限りにおいて「人間を解放する価値」を持つ、と。そしてドリュの慧眼は、社会学研究会の活動が、単に既存のアカデミズムの外部における学術的な探求を目指すものではなく、それ自体ある組織形成の実験でもある点を見逃してはいない。

われわれに理解し得る限りにおいて、これらの若者たちは、政治や宗教の外部において、人間を結ぶ組織の再構成を望んでおり、その組織は未開部族の儀礼社会や、古代神話、カトリック修道会、現代の秘密結社などと類縁性を持つようである[3)]。

ドリュは、社会学研究会のこの「行動への意志」を、いまだ明瞭に規定されてはいないとしながらも、彼らが、ルネサンス、フランス革命の結果、人間相互の関係が単に理性的なものとしてのみ残存したことに抗議している事実に強い意義を見出している。そしてこの後ドリュは、フランス人民党の熱烈な党員として、党員を結ぶ絆がまさに、知的な相互理解のみに基づいたフランス社会や旧来の政党内の脆弱で弛緩した人間関係に対立し、

その乗り越えとしてあるのだと強調する。論説を締めくくるにあたってドリュは、「政治にまったく無関係な」、バタイユら「若き哲学者たち」が、彼らの研究会の理想を明確にする過程で、フランス人民党の党員を結ぶスピリチュアルな現実を「そうとは知らずに」記述していることは驚くべきことだと語っている[4)]。

ここにバタイユの思考の一部がドリュに及ぼした影響を指摘するのは早計であろう。それはいうまでもなく、ドリュが、1936年以来すでに存在しているフランス人民党内の党員相互の絆を築くために、バタイユらの理論を必要としてはいなかったであろうからである。しかしもう一方で、ドリュがフランス人民党の体現する政治思想を論説の読者に伝えるために、社会学研究会の理論を積極的に利用しようとしていることは確かである。そしてまた、「政治に無関心な」バタイユらがその理想をアクティブに追求することで「そうとは知らずに」、ドリュの理想であるファシズムの現実を記述しているとドリュが言うのだとすれば、少なくともドリュの目には二つの思想の間に否定し難い親近性があると映っていたのであり、この熱烈な賛辞を社会学研究会へと向けられた、ドリュによるフランス人民党への参加の呼びかけと理解することも不可能ではないだろう。

さて、ドリュによる社会学研究会におけるバタイユの思考の把握はどの程度正確なものであるだろうか。社会学研究会が社会を構成する諸関係の非理性的な側面に迫ろうとしているというドリュの指摘は正しい。バタイユらの思考を、ニーチェ、ベルグソン、プルードンの系譜に位置づけることは不可能ではないだろう。しかし、社会学研究会におけるバタイユ、カイヨワらの思考にとって決定的な重要性を持つ、デュルケーム、モース、デュメジルらの理論に関心を示そうとしないドリュが、グループ構成員相互を結ぶ絆に、「魔術的、儀礼的」価値を「認める」必要性を語るとき、一見するとバタイユたちが社会内に仮定する神秘的＝非理性的力の働きを評価しているようでいながら、その実、ドリュは、構成員たる個人をその意図に関係なく無意識的構造として拘束する、社会の作用因としての側面を軽視している。例えば、『ファシスト社会主義』においてファシズムが開花

させる戦闘精神について語っていたドリュに深く関係する軍隊という社会的事象について言えば、バタイユは、1938年3月5日の社会学研究会での講演、「軍隊の構造と機能」において、「軍隊は、戦争というその機能に還元されはしない。それは多くの男たちの間に、彼らの行動と性質を変容させる紐帯を制定する。そして、このようにして軍隊は、人間の本性を変容させる。」と語っていた[5)]。ここでは、兵士の意志を超えてその行動を規定する社会組織としての軍隊の、その構成員に対する優越性がバタイユの関心を惹いているが、ドリュにとって大きな意味を持つ、行動への意志や、スポーツにも比較される男性的闘争心や身体美の肯定といった実存的側面へのこだわりは見られない。

ドリュは、フランス人民党の党員たちが彼らを相互に繋ぐ絆に「魔術的、儀礼的」力を認める必要を語っていた。しかし、紐帯の絶対的価値の承認、そしてそれへの服従を意志によって選びとる組織の構成員たちは、そのときはたして共同体の「魔術的」力の影響下にあり、意識することなくこれに導かれていると言えるだろうか。カイヨワは1970年6月のジル・ラプージュとの対談において、社会学研究会発足当時を振り返り、貴重な証言を残している。カイヨワとバタイユは、1933年以来パリ高等研究院において『ヘーゲル「精神現象学」入門』の講義を担当していたアレクサンドル・コジェーヴに、社会学研究会への参加を要請したという。しかし結局、コジェーヴは彼らの求めを断り、「聖なるもの」の力によって構成された社会についての科学的分析と、「聖なるもの」を核とした共同体の創設を共に行なおうという彼らの企図を知り、カイヨワらは自ら仕組んだトリックを前に、その魔術的力に驚嘆する手品師たろうとしているかのようだ、と意見を述べたという[6)]。このコジェーヴの指摘が社会学研究会メンバーにとって単なる笑い話を超える射程を持ったということは強調するまでもないだろう。神話を構築しようとするものが、自らによって生み出された神話を信じることの不可能性とは、社会学研究会の思想家らにとって、受け入れ難く、また同時に乗り越え不可能な困難であり続けたことは疑い得ない。確かにバタイユは、社会学研究会発足から10年後の1947年に「神話

の不在はやはり一つの神話である」[7] と語っていた。しかし、ある神話を構築しようとする社会的存在＝人間が、無意識のうちに影響を被る神話とは、彼自身が意識的に構想する神話と同一でも共外延的でもあり得ないのであり、バタイユ、そしてカイヨワもこの事実に決して盲目ではいられなかった。これに対し、ドリュの属したフランス人民党では、党首ドリオの絶対的権力が放つ男性的魅力や、これに背くことへの恐怖、そして共産主義者、ユダヤ人に対する正当化され得ない嫌悪感に支えられ組織外部へと向けられた暴力のもたらす眩暈が、党員たちに相互の無条件の信頼関係が持ち得る「魔術」的力を「意識的に」信じるという自己欺瞞を可能にしていたとは言えないだろうか。

他方、ドリュはバタイユたちが、「政治や宗教の外部で」人間の結ぶ組織の再構成を望んでいると解釈していた。しかし政治に無関心であるどころか、社会学研究会は同じ1938年の11月に、9月に締結したばかりのミュンヘン協定とは、フランス、イギリス、イタリアが、チェコのズデーテン地方割譲と引き換えに当面の戦争回避を模索するあまり、ナチスの侵攻を阻止する機会を決定的に喪失したことを意味するとして、やはり『新フランス評論』を通じて抗議することになるのである[8]。フランス人民党の党首ドリオがミュンヘン協定についてバタイユ、カイヨワらのそれと正反対の反応を見せていたことは言うまでもない。

バタイユによる『ファシスト社会主義』読解

「政治の顔を持ち、自らを政治だと思い込んでいたものは、いつの日かその仮面を脱ぎ去り、宗教運動としての姿を露にするだろう」。バタイユが社会学研究会とほぼ同時期に、クロソウスキー、マッソンらと創刊した雑誌『アセファル』は、このキルケゴールの言葉を創刊号に掲げていた[9]。バタイユ、カイヨワらの態度に政治や宗教への無関心を垣間みるドリュは、この『アセファル』におけるバタイユらの企てを把握していたとは思えない。ドリュの高い評価にも拘らず、社会学研究会がフランス人民党やフランス人民サークルの知識人の方へ歩みよらなかった事実を、ドリュとバタイユ

の奇妙なすれ違いと呼ぶならば、1937年の『アセファル』第2号にバタイユが発表した論考「ニーチェとファシズム」をめぐって、二人の思想家の間にはもうひとつのすれ違いが確認できる。1938年のそれに先立つ第一のすれ違いである。というのも、この評論の一部でバタイユはドリュのニーチェ解釈に言及しているからであり、またおそらくドリュはこれを読んでいないからである。

この論文においてバタイユは、イタリアのムッソリーニやナチスのイデオローグらによるニーチェ哲学の歪曲とその政治利用を告発していた。ルカーチ、レヴィナス、ヤスパースらの著作、論文を取り上げ、ムッソリーニ、ボイムラー、ローゼンベルクのニーチェ哲学への参照を丹念に分析するバタイユの論文は、ニーチェ哲学の受容史においてばかりではなく、ファシズムイデオロギーの同時代における分析としても質の高いものである。バタイユは、ニーチェが意志や衝動の力をあらゆる具体的行動の目的性に還元され得ないものとして示したにも拘らず、さまざまな政治勢力がこれを自らの行動の正当化のために利用したことを指摘する。ヘーゲル主義に右派と左派があったように、右派によるニーチェ主義と左派によるニーチェ主義が言及されるのはこのような文脈においてである。バタイユはこの箇所に註を付けて、政治運動に対するニーチェの影響についての『ファシスト社会主義』におけるドリュの分析を取り上げるのである。スターリンのモスクワとムッソリーニのローマに、ニーチェ主義左派と右派が確認できるとするドリュの文章を引用した後で、バタイユは次のように述べている。

> これらの文章が表れる論文において、ドリュ氏は、「行動の人間の強引な利用に供せられるのは、ニーチェの思想の残滓に過ぎないだろう」と認めながらも、ニーチェを（エリートによる）先導の意志と進歩についての楽観主義の否定へと還元するのである[10)]。

ドリュは、『ファシスト社会主義』に収められた「マルクスに抗するニー

チェ」において、ニーチェの影響を公言していたムッソリーニだけでなく、レーニンもまたマルクスの合理主義的、経済学的決定論に縛られることなく、世界の相対主義的解釈に裏打ちされた行動の哲学に動かされていたのではないかと主張していた。このようにドリュは、芸術におけるシュルレアリズムや、科学におけるアンリ・ポワンカレの予測不可能性の理論などが代表する19世紀的合理主義への批判的潮流のなかにニーチェを位置づけることを忘れないが、もう一方でドリュがその教えから引き出しているのは、能動的虚無主義とも言うべき行動の礼賛とエリートによる支配という側面である。「ニーチェは、権力への意志という形式のもとに、世界のただ中における人間の自立性を提示した。人間の行動の自立性は、結果として、人間のエネルギーの、社会運動の核とは、最大の行動をなし得る個人、エリートたる個人、主人であるということを示している。かくしてニーチェは、ファシズムが基礎を置く、二重の社会的要素を暗黙裡に示している。首領と首領を取り巻くグループである。」[11] もちろんドリュは、ヒトラーのドイツがこのエリート主義を、優生学的人種主義や柔軟性を欠いた位階の制定、ドイツ精神の鼓吹などによって、社会の静態化へ向けて展開していることをニーチェ哲学の矮小化として解釈している。またそこから、プロパガンダを思わせる筆致でドイツの軍事、経済的拡張主義を脅威と捉える立場に異を唱えている。しかし、ドリュが行動による右派の刷新とエリート主義、そして修正主義的社会主義を自らのファシズムの骨子としていたことは疑い得ない。ドリュがニーチェの哲学の政治利用に留保を設けるとしたら、それはニーチェが哲学者であると同時に詩人でもあるからであり、その文学的直観に溢れた作品から一義的な主張を取り出すことが困難だからであるに過ぎない[12]。

これに対して、権力への意志を権力掌握の意志ではなく、「力としての意志」、統合不可能な複数の「衝動」、相互に対立する心理的・生理的諸力の発現と捉えるバタイユにとって、ニーチェの思想は、生命の無目的性、その力の有効利用の不可能性を伝えるものである。バタイユは、伝統や領土、人種などを不可侵な価値として精神的同一性を追求する右翼の思想を、非

理性的な「過去への執着」と見なし、これを批判する左翼は、マルクス主義的な合理主義を貫く「理性への執着」に陥ってしまうとしていた。

> 過去から解き放たれたものは、理性の鎖に繋がれるものである。理性の鎖に繋がれないものは、過去の奴隷である。政治のゲームは、自らを生み出すためにこのような偽りの立場を必要とする。それらの立場が変容することが可能であるとは見えない。理性の法を生によって侵犯すること、理性に抗して生の要請に答えることは、政治においては実際上、両手両足を縛られて過去へと身を委ねることを意味する。しかしそれでも生は、合理的、官僚的計算からと同様に、過去からも解放されることを要請するのだ[13)]。

バタイユは、過去にも理性にも縛られない統合不可能で荒々しい生の運動を素描することに成功している。しかし、過去に執着するナショナリズムと、合理性に基づき未来を規定するマルクス主義の双方を棄却するバタイユが見出す解決は、修正主義的社会主義と戦闘的行動主義による国家社会主義の実践とは大きく異なっている。バタイユは、ニーチェ思想が内包する政治的意味の決定不可能性を析出し、その政治利用を糾弾し、左右両派のイデオロギーの脱構築的分析に成功するものの、当然のようにニーチェに忠実であり続けながら特定の政治姿勢を採ることを自らに禁じざるを得ない。非理性的な情動の肯定こそが人間の解放を可能にすると確信したバタイユは、これを政治行動が簒奪し変容させることを看取し、宗教的実践へと向かうことで実現しようとするだろう。神の起源に社会を見出すデュルケーム社会学の影響下にある無神論者たちによる、転倒した宗教的実践、秘密結社アセファルが始動されようとしている。そしてファシズムとキリスト教を敵だと名指すこの秘密結社は、アセファル＝無頭を名乗る自らの運動が帯びる政治（寡頭政、独裁政）への批判的機能を積極的に引き受けさえするだろう。

シュル・ファシズム

周知のようにバタイユは、ドリュが『ファシスト社会主義』を上梓した1934年11月の時点で、政治運動への直接参加を躊躇っていたわけではない。バタイユは1934年2月6日の暴動事件以降、ほぼ同時期に発表されていた「ファシズムの心理構造」での論考を発展させ、「フランスのファシズム」と題された著作の執筆を開始し、同時にブルトンとの和解を通じて政治グループ、コントル・アタック（革命的知識人闘争連盟）の結成を模索し始めている。このグループは、反ファシズムを訴え人民戦線内閣発足へ向かう社会党、共産党の統一行動の動きに刺激されつつも、仏露相互援助協定によるスターリンのフランス国防政策承認に従うフランス共産党を極左の側から批判し、プロレタリアートの国際的連帯を求め、無政府主義的社会主義を訴えていたと言うことができるだろう。コントル・アタックには、民主共産主義サークルの元メンバーやシュルレアリストが参加していたが、ブルトンは同時に反ファシズム知識人監視委員会にも加盟していた。また同監視委員会刊行の『大資本の力と2月6日の暴動』の著者である歴史家ジョルジュ・ミションもコントル・アタックに参加し、バタイユらとともに「労働者よ！　君たちは裏切られた」などのビラに署名していた。そのなかでは、ヒトラー、スターリンはもちろんのこと、1936年まで首相を務めた急進社会党のサロー、共産党の書記長トレーズまでが、国際的労働運動に対立する政治家として攻撃の対象となっている。さて、コントル・アタックは、ニーチェ、フーリエ、そしてサドの思想を掲げ、祖国、家族、資本家が労働者への抑圧装置であるとし、非理性的情動の解放によるその転覆を求めていた。コントル・アタックの檄文からは、バタイユがこの非理性的情動への訴えを、ファシズムが持ち出した武器をファシズムに抗して使用することとし、意図的に戦略としていたことがわかる。事実、コントル・アタックの宣言には次のような文を読むことができる。「ナショナリストによる反動は、他の国々において、労働者の世界が生み出した政治的武器を自らのために利用することができた。われわれとしては、

情動的高揚とファナティズムへの人間の希求を利用したファシズムの生み出した武器を、今度はわれわれの方が利用しようと考える。」[14] この宣言は、バタイユ、ブルトンの他、バンジャマン・ペレ、クロソウスキー、アンリ・デュビエフなどに署名されている。しかし、民主共産主義サークルにおけるバタイユの同志であるジャン・ドトリが起草し、1936年3月に配布されたビラ「フランスの砲火の下に」には、事前にブルトンが目を通していないにも拘らず署名者のなかにブルトンの名が加えられ、さらに以下のような挑発的な一文を含んでいたことから、事態は複雑化する。「われわれは（ソヴィエトにベルサイユ条約を承認させようとする）外交官たちよりも、ヒトラーの反外交的粗暴さを好む。それは実際、外交官や政治家たちの淫猥な興奮よりも平和的である。」[15] ここには、ドイツの再軍備宣言を前に、路線変更をし仏露相互援助条約を結び、国境を越えた労動者の連帯を阻むスターリン体制への憤りと、譲歩を重ねるラヴァルの弱腰な安全保障体制模索への痛烈な揶揄が込められていたのだが、ブルトンらはこの文章からヒトラーの名を削除するよう求めている。その後、ブルトンの周囲のシュルレアリストたちは、バタイユを中心としたメンバーたちの傾向をシュル・ファシズムであると非難し、コントル・アタックは分裂して行く。バタイユの友人、民主共産主義サークルの旧メンバーであったピエール・デュガンは、ファシズムがシュル・マルクシズムとしてマルクス主義を打倒した以上、ファシズムを打倒できるのはシュル・ファシズムであるとして、この呼称はむしろ反ファシズム的姿勢を裏切るものではないと主張しているのだが[16]。

このファシズムがわがものとする非理性的情動とは、1933年11月と1934年3月に民主共産主義サークルの機関誌『社会評論』にバタイユが発表した「ファシズムの心理構造」において、共和政下の議会制が排除する異質性として提示されていたものである。普通選挙による議会制は、少数派、すなわち民族的マイノリティーや経済的弱者を排除し、同質性を形成することで成立するとバタイユは考えていた。そして同質的社会の形成によって自らを守ろうとするブルジョワジーによって、プロレタリアートや

移民は、彼らを脅かす怒りや旺盛な生命力、暴力などの表象を投影され、非理性的情動に開かれたもの、社会にとって異質性をなすと捉えられていた。バタイユは、ムッソリーニが当初社会主義者としてプロレタリアートの解放を公言していた事実、オーストリア人であるヒトラーが「長いナイフの夜」以前である当時、突撃隊に失業者や労動者を参加させていた事実を参照し、ファシズムを同質的社会のただなかにおける異質性の湧出であると解釈していた。しかしバタイユによれば、ファシストは暴力によって議会制を覆し政権に就くと、それ自体として希薄な存在理由しか持たない同質性を上部から支配し、これを保護する強権的異質性へと変容するのである。そして同質性へと接続されない、社会的擾乱をもたらす元来の異質性、プロレタリアートにこの新たな社会を転覆する可能性が託されていたのである

2月6日の暴動に革命の予兆を見ようとするドリュも、バタイユに近い視点から暴力による議会制の粉砕をファシズムの契機として考えていた。そして議会制に代えて、ファシズムが強力な権威主義的政府を導くと捉えている点でも両者の視点は近似している。両者の解釈に越え難い差異があるとしたらそれは、バタイユにとって革命後に成立する権威主義的政府は、プロレタリアートからなる社会的擾乱を導く異質な力を統合できないばかりか、抑圧していると捉えられている点であろう。ドリュにおいても、極右と極左の融合ではなく、社会党右派ないしは急進社会党左派のエリートがプチブルからなる中流層の支持を得て行なう社会主義的政策は、プロレタリア独裁を目指す階級闘争の解体を前提としていた。しかしドリュはもちろん、ジュヴネルそしてデアも、反ファシズム知識人監視委員会による『ファシズムの社会主義的主張』などにおける論考を目にしていたはずであり、ファシスト国家における社会主義政策の欺瞞に無自覚であり得たとは思えない。それでも彼らが「上からの社会主義」によって中流層を保護し、プロレタリア運動を崩壊させる危険を冒すことを顧みないとすれば、それは政治的リアリズムにおいて、スターリンのソヴィエトを前にした非共産

党系極左の運動の無力を理解していたからであり、国際政治上の緊張が高まるなかフランスにおいても必要とされる国民の統合を掲げるナショナリズムが、彼らにこの犠牲に対して目をつぶることを可能にしていたからとは言えないだろうか。

1934年2月12日とフランス左翼

バタイユはファシズム勢力に対するプロレタリアートの勝利を素朴に信じていたわけではない。未刊草稿「フランスのファシズム」や、1934年2月12日のゼネストに参加した自身の経験を綴った「ゼネストを待ちながら」における論考は、オーストリアの社会民主党が粉砕された以上、独裁という観点からソヴィエトをも含めたファシスト諸国家の世界的覇権を前に、国際的労働運動が風前の灯火であることを確信しているかのようである。それでもバタイユは、2月6日の暴動の直後、予告されていた12日のゼネスト、そしてデモの開始を、当日、パリの街頭で待ちながら、仮にデモを行なう労動者の隊列が冷静さを失い、警官隊との間に武力衝突が生じるならば、いたずらにブルジョワの恐怖をかき立て、それによって愛国主義者たちの暴動に新たな口実を与えることになることを懸念している。バタイユはこの観点から、大規模な示威行動を平和裡に成功させる必要性に理解を示している。つまりこの時点でバタイユは、人民戦線政府発足を導くことになる、社会党、共産党の前例のない統一行動を支持しようとしているのである。しかし、急進社会党をも抱き込んだ人民戦線が国内においてファシズムに対する防御壁となり得るとしても、この中道左派と左翼の連合は同時に、「下からの社会主義」であるプロレタリアート革命実現への道を塞ぐことを意味する。さらに国際政治においてドイツ、イタリア、スペインの脅威を前にした人民戦線政府の平和主義の無力が次第に露になるにつれ、労働運動の勝利は絶望視され始める。こうしてバタイユは、その非理性的情動の解放としての「悲劇的」、倒錯的革命観を極限にまで押し進め、ソヴィエトからも裏切られた国際的、無政府主義的労働運動が、これを圧殺しようとするファシズム、またこれを回収しようとする共和主義勢

力をも含めすべてを、その自己破壊的暴力湧出の過程に巻き込むことで、大いなる破局へと至る可能性に、革命運動自体の成就を見ようとすることになるのである[17)]。

註

1) Pierre Drieu La Rochelle, “Vers une conception réaliste de l’homme”, *L’Émancipation nationale*, hebdomadaire du Parti Populaire Français, le 22 juillet 1938, p.2. 1938年8月5日の同誌におけるドリュの “Le fond philosophique de notre Doctrine” にも、社会学研究会の思想の解釈によって始められたドリュの考察が新たに展開されているのを見ることができる。因みにフランス人民党の党首ドリオは同年９月の紙面において、ミュンヘン協定の締結を、ドイツとの戦争をも辞さないマルクス主義者に抗して、ムッソリーニ、チェンバレンが平和を勝ち取ったと解釈しこれを歓迎している。

2) Denis Hollier, *Le Collège de Sociologie 1937-1939*, Gallimard, 1995, p.13.

3) *op.cit*.

4) *ibid*.

5) Georges Bataille, “Structure et fonction de l’armée”, in *Le Collège de Sociologie*, *op.cit*., p.207.

6) Roger Caillois, “Entretien avec Gilles Lapouge”, *Quinzaine littéraire*, numéro 70, 16-30 juin 1970.

7) Georges Bataille, “L’absence de mythe”, *Le Surréalisme en 1947*, Edition Pierre à Feu/Maeght, 1947.

8) “Déclaration du Collège de sociologie sur la crise internationale”, texte repris dans *Le Collège de Sociologie*, *op,cit*., pp.358-363.

9) Georges Bataille, “La Conjuration sacrée”, *Œuvres Complètes* tome 1, p.442.

10) Georges Bataille, “Nietzsche et les fascistes”, *Œuvres Complètes* tome 1, p.451.

11) Pierre Drieu La Rochelle, *Le Socialisme fasciste*, *op.cit*., p.70.

12) 吉澤英樹は、「ニーチェとファシスト ── ドリュ・ラ・ロシェル「マルクスに抗するニーチェ」を巡って」（成城大学フランス語フランス文化研究会『*Azur*』第3号、2002年3月）において、この「ニーチェとファシスト」におけるバタイユによるドリュへの言及を取り上げている。吉澤の論考は、20世紀初頭フランスにおけるアレヴィ、ソレルを介したニー

チェ哲学の受容を仔細に検討し、プレ・ファシスト期のドリュによるニーチェ読解から、『ファシスト社会主義』、さらにフランス人民党入党以降のニーチェ解釈の連続性や変容を詳細に検証している点で示唆に富むものである。吉澤の論考はバタイユがニーチェのなかに見る「流動的な mobile」衝動の肯定と、ドリュによるニーチェ解釈の近似性を問題としている。しかし、ドリュが『ファシスト社会主義』において、相対主義的世界観のレーニンへの間接的影響を語る文脈のなかで用いる "cette philosophie de la mobilité et de l'action" という言葉は、直接の内容としてはパレート、ソレル、ポワンカレの思想を指す「運動と行動の哲学」と理解されるべきであり、吉澤が言うように「流動性と行動の哲学者」＝ニーチェと解釈することには困難が伴うように思われる。他方、ジュヴネル、アンドルー、ネオ・ソシアリストとの議論を通じファシスト宣言をする『ファシスト社会主義』執筆時のドリュが、ナチスによるニーチェ思想の利用の一面に批判的視線を向けるからといって、そのファシズムへの加担がこの時点ですでに「シニカルな」ものであり、バタイユがそうしていたように、「ファシズムの彼方」を見ていたと言えるのか疑問が残る。

13) Bataille, *op.cit*.

14) "Contre-Attaque, Union de lutte des intellectuels révolutionnaires," *Œuvres Complètes* tome 1, pp.379-383

15) *ibid*., p.398.

16) Pierre Dugan, "Note sur le fascisme", texte repris dans *L'Apprenti sorcier*, *op.cit*., p.295.

17) バタイユはこの「ゼネストを待ちながら」のなかで、『若者の闘い』、フランス人民党におけるドリュの朋友ジュヴネルが、週刊誌 *Vu*『ヴュ』の2月6日の事件特集号において、示威行動参加者たちを統合へと導き得る火の十字架団の潜在力を高く評価し、ジュヴネル自身が行なったラ・ロック中佐へのインタビューを引用しながら、この政治思想の点では脆弱な組織にイデオロギーを吹き込むことに意義を認めていた事実を指摘し、警戒を促していた。またバタイユは、ジュヴネルが、ベルジュリに共闘を拒絶された後、自身と同じ親ドイツ派で1934年当時『マタン』紙のベルリン特派員であった極右のフィリップ・バレスと、元共産党員でり、ジュヴネルが「わが友」と呼んでいたジョルジュ・ヴァロワのフェソーにも参加していたフィリップ・ラムールらとともにファシスト的組織を立ち上げようとしていると揶揄している。